慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戰國式銅器の研究(梅原末治著, 東方文化學院京都研究所)
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1936
Jtitle	史学 Vol.15, No.3 (1936. 11) ,p.144(508)- 145(509)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19361100-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

和宮は仁孝天皇の第八皇女、親子内親王で、將軍德川家茂の夫人である。其の御生涯は僅か三十二歳の短日で、然も其の間、所謂國家多事波瀾曲折多い世で、終始血涙史であつた。卽ち勅命を奉じて、國と民との爲めならばとの御詠を殘し固い御決心を以て關東に降嫁あるや、御同棲は僅かにして夫家茂の陣歿に遭ひ、後、靜寛院宮と號して貞節變ることなく、朝夕其の冥福を祈り、更に幕府滅亡の悲運に際會しては毅然たる御覺悟を以て、江戸城を寸分たりとも離れずして、只管婚家德川氏の社稷の安寧を歎願せられ、其の至念遂に達して、江戸城池の明渡は談笑歡語の裡に無異行はれ、圖らずも城下百萬の人命財産は完うされ、其の救國的功績は永遠に靑史に炳燿して不朽である。

最後に筆者は著者に多年知遇を辱うするを敬謝し肯て江湖に本書の一讀を薦める。（武田勝藏）

戰國式銅器の研究（梅原末治著　東方文化學院京都研究所）

パリの骨董商ワニエック氏に依り山西省の李峪より齎らされた支那古銅器の一類は爾來秦式銅器として歐米の蒐藏家の注目するところとなつてゐたが、著者は往年の外遊に際し、此の遺品に興味を持たれ熱心に資料を蒐集され、その調査の結果は本誌十卷三號にも「所謂秦銅器に就いて」として發表せられ、また十一卷三號餘白錄にも李峪の位置を補正されてをる。此等の研究を昭和七年度研究所の報告として「所謂秦銅器の研究」と題し纏められて提出されたものを今回更に修正して印刷されたもの卽ち本書である。

李峪の遺物は一九二三年の初め暴風雨に依つて崩れた斷崖から偶然發見された窟の中から發見されたもので、當時包頭にゐたワニエック氏は直ちに同地に來り私人に隱匿せられてゐた靑銅品類を買ひ集めてパリに齎したものである。本書の註の中に梅原氏は、ワ氏が著者に宛てた手記を發表され、當時の發見の狀態を一層明かにされてをるのは悅ばしい。勿論ワ氏の手に歸したもの以外當時官憲に沒收され今日太原に保管される一群、及びその他に散佚した遺品あり、著者は手の及ぶ限りその寫眞を集め之を精巧な圖版として本書に採錄されてをる。此の銅器の有する特性は或單位圖形を繰返して繁褥な圖文を作ることであり、また金錯並に硯石の技術などを伴ふてをることである。著者は更に同類の遺物の各地に發見された例を說き、その樣式が殷周時代と漢時代との中間に位するものなることを明かにし、之を戰國式銅器として呼ぶべきことの妥當なることを提唱し、更にかゝる新樣式の發生の因に西方よりスキタイ文物の影響あることを推察されてをる。

本書が戰國時代文化の一研究として一つの指導標を確立したものであることは何人も認めなければならぬだらう。一體支那の文化領域は極めて廣大に汎り、その一局地の發見から同時代の全貌を推察し去ることは極めに困難であることはいふまでもない。然し乍ら支那の考古學的發見は從來多くの場合偶然的であり、遺物は直ちに散逸し去ることが多い。著者の如き精勵なる考古學者が四方に分散した一括遺物を全世界に汎つて調査され、その資料を一冊に蒐錄され、出版せられることはまことに學界の爲に感謝す

べき業績と云はねばならぬ。著者は更に最近多く戰國時代文化遺物の出土した金村の發見遺物に就て同樣な雜錄を出版せられるさうであるが、斯くの如きアルバイトに依り漸次支那考古學の確實な資料が記錄化され、支那考古學の全貌を知るための礎石が打建てられてゆくことは吾人にとつて限りなく悅ばしい。願はくば著者が將來益々その足まめ筆まめを發揮されて此の種の刊行に世を益されんことを希望する。その中には支那の時局も平靜になり、吾人の望む地點に於て計畫的發掘が何人に依つても遂行され得る時代が來るであらう。速かにかゝる時機を將來させて支那考古學を眞の意味の正道に濶步させたいものである。

本書の最後に森鹿三氏が李峪の歷史地理的小研究を添へ、山岳祭祀の遺品として李峪の發見物を解釋する場合如何なる見地に立つべきかを述べられてをるのも有益な記文である。（松本信廣）

史學集刊（國立北平研究院史學集刊編輯委員會印行）

從來比類なき優秀な文化機關を擁し、文化都市として譽れ高かつた故都幽燕も、近來貴重な物書の南遷により、漸く內容空虛化せんとする傾向がある、又北平に於ける文化機關中、重要な地位を占めてゐた中央研究院北平分院も不日南遷の計畫がある、此の時に當り、北平研究院が故都文化機關のため、大いに健闘し、その業績また睹るべきものあることは注目に値する。

北平研究院は民國十八年九月正式に成立した文化機關である。成立以來日なほ淺いが、生物學、植物學、動物學、地質學、考古學、史學方面の研究大いに睹るべきものあり、殊に史學研究會が本院內に設けられ、徐炳昶氏が考古組主任、顧頡剛氏が歷史組主任に夫々聘せらるるや、史學研究會は頓に活氣を呈するに至つた。史學研究會は民國十八年に成立したのであるが、その目的は（一）北平志の編纂、（二）北方革命史料の蒐集、（三）淸代通鑑長編の編纂、（四）發掘及考古等である、民國二十年に徐炳昶が考古組主任に聘せらるるや、考古組は考古組及調査編纂組の兩方面に分れた、二十二年考古組は陝西に於て、豐鎬、犬邱、阿房宮等の遺址を調査し、二十三年及二十四年上半期に、寶雞門雞臺、唐中書省の舊址を發掘、二十四年下半期は、河北河南の境上にある響堂山に於て石刻其他の調査に從事した。

調査編纂組方面の主要な工作は、北平廟宇の調査及び近代史料の蒐集にあつた。二十四年七月、顧頡剛氏が同會の歷史組主任に聘せらるるや、史學研究會內に正式に歷史及考古の兩組が成立するに至つた。

かくて二十三年九月、北平金石目（壹元貳角）、北平史表長編（二册貳元）、二十四年一月考古專報（第一卷第一號貳元）、同年七月、近代祕密社會史料（四册三元）等の良書が續々刊行され、同會の目的が着々實現されつゝあることは、同會のため寔に欣快の情を禁じ得ない。

史學集刊は本年四月北平研究院史學集刊編輯委員會より創刊されたもので、年二回刊行の豫定である。

次に本書收錄の題名を揭げることにする。

校金完顏希尹神道碑書後　　徐炳昶